＝特別シリーズ＝

挑戦する国立大学法人

地域貢献・社会連携への新たな取り組み ⑬

東北大学のチャレンジ

21世紀社会に向けた新しい「門戸開放」

第1部　開かれた門から社会に歩み出る大学の新しい試み

東北大学は帝国大学として初めて女性を入学させたことをはじめとして、学歴や経歴に捕らわれず、国内外に多様で才能のある教員や学生を受け入れてきた。つまり、開かれた門から多様な人材を受け入れる「門戸開放」を開学以来の大学の方針として掲げてきた。これからの社会要請や、大学法人化の環境変化を先取りして、東北大学では「開かれた門から大学自ら社会に出ていく」新たな門戸開放主義の実践を始めている。以下にそれらの試みの幾つかを紹介する。

100周年記念セミナー

http://web.bureau.tohoku.ac.jp/100aniv/campaign/old.html 参照

・2007年に東北大学が創立100周年を迎えるにあたり、日本経済新聞社と共催で、東京を会場とした一般の方を対象とし、最先端の学術に携わっている教員等が東北大学の成果を一般社会人等にわかりやすく講演するセミナーを開催している。

・2005年1月から2006年8月まで6回開催した。新聞紙上でセミナー開催広告を掲載し、延べ8、400名の参加応募があった。1回で最高2千人あまりがあった。

・600人という会場の制約があるので、抽選に当選した応募者に参加いただいている。

・セミナーの反響をアンケートでモニターしているが、参加者の反響はすこぶる好評である。また、回を重ねるごとに参加希望者が増大していることからも、その好評ぶりが伺える。

・セミナー開催後、セミナーの報告と東北大学が社会に向けて発信するメッセージを新聞紙面に掲載している。このメッセージは東北大学が、その開いた門から社会に向けて積極的にその特色をアピールするものであり、将来的には東北大学のブランド力の向上も目指している。

・日本経済新聞社のコメントでは、このような試みを国立大学が組織的に行う例は今までになかったとのことである。本学の試み以後幾つかの国立大学で類似の活動がなされていると聞いている。

・産業界を対象として産学連携セミナー（東北大学イノベーションフェア2006）も東京で開催しており、これも満員となる盛況である。仙台でも「東北大学イノベーションフェア2006 in 仙台」を平成18年10月18日（水）に開催回予定。

サイエンスカフェ（教員が自ら街角に出てゆく新しい試み）

http://cafe.tohoku.ac.jp/参照

・従来から出前授業や各種講演会など、特定の学生、社会人を対象とした講演などの試みは、多くの大学で行われてきた。東北大学では、仙台市の施設をお借りして、研究者が多様な市民を対象とし、講演を行いつつ市民と対話するサイエンスカフェを2005年度から行っている。

・聴衆は、高校生・主婦・仕事帰りのサラリー

100周年記念セミナー

イノベーションフェアー2006

マン・退職した方、など幅広い参加者から支持を受けている。

・月1回の定例サイエンスカフェとタイムリーなトピックスに関する臨時カフェとで構成され、2006年8月で15回を数える。

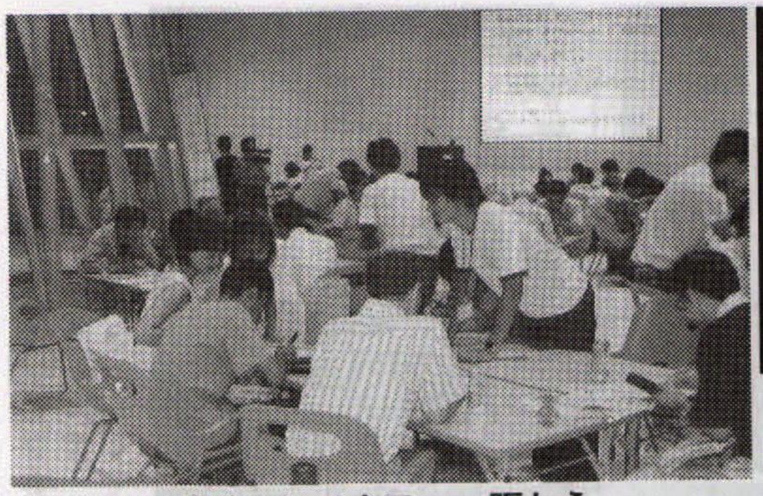
・東北大学のサイエンスカフェは、比較的小規模の組織で実施されている他のものと比べて、大学全体の試みとして行われており、ユニークな特徴をもつ。

・カフェでは大学院生等のファシリテーターが各テーブルに配置され、参加者のディスカッションを活発にする。講演者も聴衆と密に交わることによって、研究上の新たなアイデアを得ることも多いと聞いている。

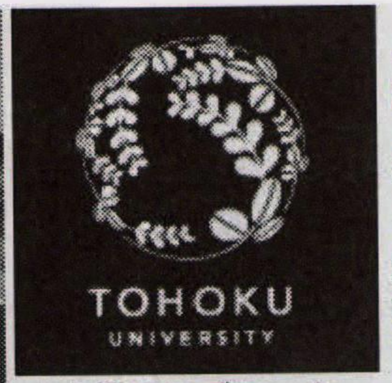
・参加者は回を追うごとに増加し、300人程度になることもあった。

・マルチメディアを活用し、全国10カ所以上に講演を同時配信し、相互通信による質問の受付、携帯メールによるアンケートのその場集計など、最先端技術を駆使した新しい試みも行っている。

・地元新聞社や放送局・ケーブルテレビと協力し、成果を各社のホームページに掲載し、大学のホームページからアクセスできるようにしたり、地元ケーブルテレビから見えるようにするなど、地域を密接に協力した広報や市民へのサービスも進めている。



サイエンスカフェー賑わう



大学のロゴマーク

サイエンスカフェとは

サイエンスカフェは従来の研究会や講演会とは異なり、次の特徴をもっています。

(1)独創的な科学技術を生み出す研究者の発想や科学技術の社会への貢献など、サイエンスをいろいろな角度から眺めて議論します。

(2)議論が活発になるように、また研究者と市民の交流が深まるように、比較的小規模でかつ対面的なコミュニケーションの場を演出します。

(3)大学という閉空間から飛び出し、市民にとって身近な場所で開催することによって、サイエンスを文化として楽しみます。

(4)現在まさに研究が進行中の最先端の科学技術に関する話題について、その研究を進めている当人が話すことによって、研究段階で市民の反応を知り、これからの社会が必要とする科学技術に対するイマジネーションを高めます。

本学の企画ではさらに、これまでの欧米のサイエンスカフェにはない特徴として、

(5)大学生、中高生などの若い世代に、知的感動と未来の社会の担い手にふさわしい科学技術に対する知識を与える場となるように企画します。

公式ロゴマークの制定

http://www.tohoku.ac.jp/japanese/pub/mark.html

・東北大学では、これまで正式なロゴマークが決められていなかった。

・これからの大学の国内外での競争の激化に呼応して、各大学の特徴を強調することが重要となっている。今後、大学の特色を生かしたユニバーシティ・アイデンティティの確立が大学に求められるようになろう。

・このような要請から、本学では2005年4月に新しい公式ロゴマークを制定した。ロゴマークの制定にあたり、学内外の意見を聴取することはもちろん、これからの国際的な競争に対応するために、外国の会社にロゴマークのデザインを依頼した。

・この新しいロゴマークは短期間に学生職員に受け入れられ利用されている。とくに、現役の学生や海外の評判が良好なようである。

・本ロゴマークは、東北大学としてのブランド力の強化に大いに貢献しているとともに、マグカップ、クリアーフォルダー、Tシャツなど、東北大学オリジナルロゴグッズにも使用されている。

（以下、次号に続く）

＝特別シリーズ＝

挑戦する国立大学法人

地域貢献・社会連携への新たな取り組み ⑬

東北大学のチャレンジ

21世紀社会に向けた新しい「門戸開放」

第2部　開かれた門から世界に発信する国際ネットワーク構築の新しい試み

東北大学は、世界の主要大学と92（2006年9月現在）の大学間交流協定をむすんでおり、部局間交流協定は238（2006年9月現在）に達している。本学ではこれらの交流協定の実質化を進めており、形式的な交流協定は廃止しているが交流協定校の数は依然として増加している。この傾向は、国際的な傾向といえるだろう。また、留学生は1、194名で、本学全学生の6・7％とくに大学院生は全学生の12・2％に達している。また、外国人研究者の数は、1、069名である。これら実績は、国内大学では最高水準（東大・京大に次いで3位）であるが、オーストラリアや欧米諸国と比べると必ずしも高い水準とは言えない。今後、国際競争の激化に伴い、日本の大学の国際化と競争力強化は不可避な命題といえるだろう。

東北大学では、このような対応に向けて新たな戦略的取り組みを大学全体で実施している。その幾つかを以下に紹介する。

国際ネットワークの構築

・本学では、2000年8月に開催された「大学間国際交流仙台フォーラム」において、国際交流拠点の形成を宣言している。この宣言に基づき、国際交流の重点拠点として世界の11の主要大学等と東北大学に海外相互リエゾンオフィスを設置し、大学間協定とは異なる次元での重点的国際交流を推進している。さらに、カリフォルニアに東北大学ブランチを設置した。本年度中に中国北京に海外オフィス設立の準備を行っている。

・これらの拠点では、研究者・学生の交流を大学として重点的に進めることによって、メリハリのついた国際交流を大学規模で推進することを目指している。

・これらの重点交流校を中心として国外拠点校との国際アライアンスの構築も検討している。

国際セミナーの実施

・東北大学では、ドイツ・ゲッチンゲンと英国・ケンブリッジで東北大学のセミナーを実施してきた。これは、海外での東北大学の研究を知ってもらうことと、大学間の結びつきを強固にすることが目的である。

・2007年2月には、フランス・リヨンにおいて、東北大学100周年、ECL150周年、INSA de LYON 50周年の合同記念セミナーを開催する予定である。また、同年12月には東京で日仏セミナー開催の準備

ゲッチンゲンフォーラムの一コマ

ケンブリッジフォーラムのもよう

を進めている。

・また、東北大学の研究活動を海外に紹介する、産学連携セミナーも海外で実施している。また、海外の研究者企業を招いたセミナーも東北大学で実施している。

・東北大学は、近代中国に貢献した魯迅が学んだ大学であり、これを縁にして江沢民前主席が来学するなど、中国との関連が深い。東北大学では、「魯迅先生東北大学留学100周年記念事業」の一環として中国において魯迅国際セミナーを開催し、中国との関係を強化している。

ダブルディグリープログラム

・世界の大学では優秀な学生を受け入れるために種々な方策を実施しているが、その一つとしてダブルディグリープログラムがある。このプログラムは、大学の優秀な学生に2つの大学で学ぶ機会を与え、両大学から学位を授与するものである。

・本学でも、このプログラムを清華大学とリヨンECL、INSA de LIYONとで実施している。

・本年度は、清華大学から3名、ECLから2名の学生を東北大学に受け入れる予定である。本学からもこのプログラムに参加する学生を募集している。

戦略的国際交流の推進

・これまで東北大学の国際交流は、教員の個人的な繋がりや部局の国際交流を基礎としたものであり、多様で活発な交流が行われてきたが、大学としての戦略性に欠けるものであった。本学では、大学としての戦略的な国際交流を進めるために幾つかの試みを進めている。

・部局や教員個人の国際交流推進に加えて、戦略的な国際交流指針とその実施を目的とした「国際交流企画室」を設置し、教員・事務員が協力した国際交流方針の策定とその実施にあたっている。ここでは、国際交流協定の検討や海外オフィスの設置、留学生サービスの実施形態の議論など幅広い企画とその実施方策の策定が進められている。

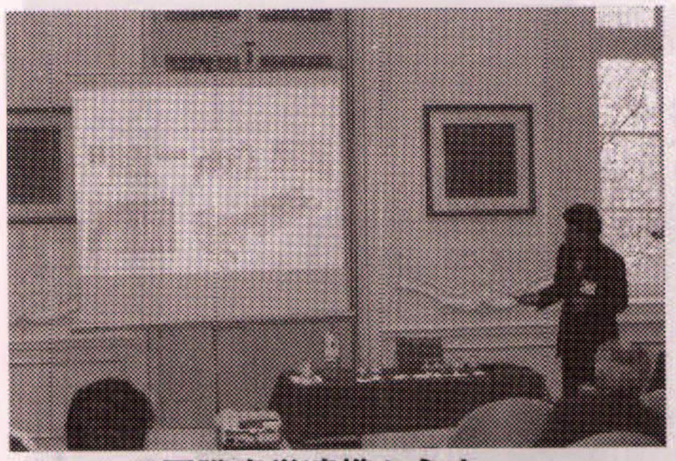
・本学では、東北大学国際交流戦略の基本指針を2005年3月に策定し、その基本指針に基づき大学の国際交流事業を進めている。

http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kokusai/department/guideline/guideline_j.html

・「グローバルオペレーションセンター」

http://www.bureau.tohoku.ac.jp/goc/top.html

を東北大学内に設置し、実質的な戦略的国際交流の実施、海外ブランチの設立準備、国際セミナー実施などを推進している。



国際産学連携セミナー

ダブルディグリープログラムの締結。右が吉本学長

グローバルオペレーションセンター関係会議